

子どもの楽天主義：望ましくない特性の
変容可能性についての信念の発達

Children's Optimism: Development of Beliefs
about Changeability of Negative Traits

中島伸子*・稲垣佳世子**

Nobuko NAKASHIMA and Kayoko INAGAKI

Abstract

The present study examined whether children's optimism would be observed in Japanese children who grow up in culture where self-enhancing bias, an optimistic tendency, is not as dominant as in the U.S. Twenty-four each of 5-, 6-, 8-10-year-olds, and college students were asked to predict whether each of eight negative traits would change as a character matured from age 10 to 21 (young adult) and from 21 to 80 (older adult). Results indicated that (1) the 5-year-olds showed "naive optimism" in that they believed the negative traits could change in extreme positive direction not only in young adults but also in older, due to maturation or increased age. (2) The school-aged children and adults showed "effort-dependent optimism" in that they believed the negative traits could change to average, based on personal effort or practice. (3) All the participants applied "optimism" to varied traits selectively. The significance of children's optimism as a motivation in the long-term acquisition of skills or expertise, as well as its nature, is discussed in terms of culture-free and culture-bound development.

key words: children's optimism, changeability of traits, cultural influence

問 題

最近、幼児が人間のもつさまざまな特性をどのように捉えているのかについての関心が高まっている。これまでの研究の多くは、性格特性に焦点化し、特性が時間や場面を超えて安定していることを幼児が理解しているかを検討している。そこから明らかに

なってきたことは、幼児は年長児童や大人に比べて特性の情報を使うことは上手ではないが、しかし全く使えないわけではない、というものである。とくに最近の研究ではそうした報告が見られる。例えば Gnepp & Chilamukurti (1988) は、幼稚園児(6歳児)でも、物語の主人公の将来の行動について性格特性と一致した行動を予測できることを、Heyman & Gelman (1999) は、幼稚園児が特性ラベル(例えば「いい人(nice)」)に基づいて他者の心的状態を推測できることを報告している。さらに、幼児ではまだ特性の安定性を理解していないとされてきた従来の研究でも、幼児が異なる場面で一貫し

2006. 9.28 受理

*新潟大学教育人間科学部

**千葉大学教育学部

た特性推論ができないのは(特性を安定したものと考えていないと解釈できるのは)特性が望ましくない場合が圧倒的に多いこと、逆にいえば、望ましい特性については特性と一致した行動を予測できることも指摘されてきた。例えば Rholes & Ruble (1984) は、5～6歳児は、9～10歳児に比べて、特性と一貫した行動を種々の場面に適用するのが劣っていたが、年長児との差が大きかったのは望ましくない特性の場合であり、望ましい特性ではさほど大きな差は見られなかった。同様の結果は3～6歳児を対象とした清水(2000)にもみられる。このような研究結果は、幼児が望ましくない特性は将来よい方向に変容する可能性があるという信念をもっているのかもしれないことを強く示唆する。

Lockhart, Chang, & Story (2002) は、望ましくない特性の将来にわたっての変容可能性の信念を幼児の楽天主義と呼び、幼児がこのような楽天主義をもっていることは進化心理学的視点からみても理にかなっているのではないかと主張している。幼児は大人へと発達する過程で多くの技能を学ばなければならないが、そうした技能の多くは獲得までに時間がかかり、しかもその過程では多くの失敗に出会い、かなりの苦痛も伴う。それにもめげず多大のエネルギーを費やして学びつづけられるのは幼児がこのような楽天主義をもっているからではないか、というのである。そして5～6歳児、7～10歳児、大人を対象とした一連の実験で、幼児の楽天主義の存在が確かめられたと結論している。そこでは、5歳のときも10歳のときも持っていた望ましくない特性(例えば「クラスの友だちの誰よりも背が低い」「クラスの友だちの誰よりも意地悪」など)を変えたいと思いつづけたら大人(21歳)になったときにはどうなるかを3選択肢のもとで答えさせた。その結果、幼児は小学生や大人に比べて、望ましくない特性は大人になるととても望ましい方向に変化するという信念が強く、逆にとても望ましい特性については大人になっても変化せずそのまま維持され続けるという信念を持っていることが見いだされた。さらに理由の分析から、望ましくない特性の変容可能の理由として「加齢・成熟(大きくなったから)」をあげることが幼児では多かった。(なお Lockhart らはそうした言葉を使っていないが、本研究ではこれを「素朴楽天主義」とよぶことにする。)

無力感の研究でくり返し報告されてきたように、何度も失敗に出会うと人はさらに努力することを放棄してしまうのに(e.g., Dweck & Elliot, 1983),

幼児が発達過程でのさまざまな技能の獲得においてくり返し失敗に出会っても努力し続けるのはなぜかの説明として、この幼児の楽天主義という考えは興味深いものといえよう。しかしながら Lockhart らの実験結果からは確かに幼児に「楽天主義」が存在し、それは幼児に普遍的なものである、と結論するのは早計である。その理由は2つある。第1の理由は、彼らの研究では、発達の到達点として用いられたのは諸能力・諸機能の増大傾向のある若年成人期(21歳の大人)までであるため、「年齢の増加とともに能力の向上のみられる発達」と「同じ年齢コホート内での個人の進歩」とを幼児が混同していた可能性があることだ。いいかえれば幼児から大人への一般的な発達と個人差の発達とを混同した可能性である。もし幼児に本当に(素朴な)楽天主義が強いとすれば、能力の増大がみられない、ないし低下がみられる老人期の大人になったときでさえも幼児期における望ましくない特性は、望ましい特性へと変容すると予測するかを調べる必要がある。

第2の理由は、Lockhart らの結果はアメリカ(ないし欧米)の文化に特有の現象ではないか、という可能性である。成功・失敗の原因帰属に関する欧米の研究から、アメリカ人は自己の成功を「楽天的に」期待する傾向、自己高揚的バイアスがあることが指摘されてきた(北山, 1998)。幼児における望ましくない特性が将来は望ましい特性へと変容するはずだという信念は、こうした「楽天的」なアメリカの国民性の反映かもしれない。もし Lockhart らの進化心理学的視点からの説明が正しければ文化の違いを超えて幼児の楽天主義がみられるはずであるが、それを確認するためには、自己高揚的バイアスが存在しない文化のもとでも同じような結果がみられるかどうかを調べる必要がある。北山(1998)によれば、日本での原因帰属の研究ではアメリカでのそれとはちがって「自己高揚的バイアス」は見られず、むしろ自己批判的傾向が強いという。日本では努力が特に重視されるが、これは自己批判が努力や向上心と結びつくことによって肯定的な意味をもつようになるからではないかと彼は主張している。

そこで本研究では、発達の到達点として若年成人期(21歳)だけでなく、老人期(80歳)までを含め、日本の子どもにおいても楽天主義が見られるか——望ましくない特性が変容する可能性を信じているか——を調べることを大きな目的とする。幼児が一般に老人期の大人能力をどのように認知しているかに関する研究は少ないが、現在までに報告されてい

る研究では、老人期には能力の低下がみられることをある程度幼児でも理解していることを示唆している。例えば老人は若年成人より、病気のなりにくさ (Weinberger, 1979), 走る速さ (Miller, Blalock, & Ginsburg, 1984-85), 頭のよさ (Rosenwasser, McBride, Brantley, & Ginsburg, 1986) など劣っていると幼児が認知しているという報告がある。もし幼児に (素朴な) 楽天主義が存在するとすれば, 幼少時にもっていた望ましくない特性は, 若年成人期だけでなく, 老人期においても望ましい特性への変容が見られると予測するであろう (予測1)。この予測を確かめることが本研究の第1の目的である。

本研究の第2の目的は, 小学生以降大人にいたる「楽天主義」の存在とその性質を明らかにすることである。Lockhart 他 (2002) では望ましくない特性の変容可能性の信念 (楽天主義) にもとづく反応は年齢の増加とともに低下するが, しかし全く消失するわけではないことを見出ししている。とても望ましい特性へと変化はしないまでも中程度に望ましい方向への変化はありうるとする反応は, 小学生では50~65%, 大人では37~48%みられた (ただしとても望ましい特性への変化を選択した大人は2%)。大人が中程度の変容可能性を信じる理由がどのようなものかについては報告されていないが, 小学生では, 幼児に多かった「加齢・成熟」の理由 (26%) に代わって「努力・練習」によるとする理由づけ (21%) が多く見られたという (幼児ではこの理由づけは4%)。学ばなければならぬ技能が依然としてまだ多いという点では, 学童期の子どもでもある種の楽天主義の信念が必要とされるが, しかし他方では幼児に比べて現実認識がより正確になる学童期の子どもでは素朴な楽天主義をとることには気が進まないかもしれない。とすれば, 素朴な楽天主義にかわって, 努力と練習さえつめばよい方向に変わるはずだという, いわば「努力依存の楽天主義」とでもいうべき楽天主義をもつのではあるまいか。こうした「努力依存の」楽天主義は, 文化の影響を受けやすいかもしれない。知的達成に関して, アメリカの能力重視の信念に対して, 日本は努力重視の信念の強いことが指摘されてきた (e.g., Sato, Namiki, Ando, & Hatano, 2004; Holloway, Kashiwagi, Hess, & Azuma, 1986)。アメリカ文化に比べて努力志向の信念の強い日本文化のもとではこの「努力依存の」楽天主義はより強く見られやすく, 小学生以降大人においてかなり高い割合で見られるのではないだろうか。これを予測2とする。

本研究の第3の目的は, 楽天主義の及ぶ範囲を明らかにすることである。そのために, 性格特性だけでなく, 身体特性も身体構造に関わる特性と身体機能に関わる特性に分けてとりあげる。また人間には存在しない特徴 (空中に浮かぶ) も含める。意志や願望による特性の変容可能性を調べた従来の研究 (但しいずれも短期の変容可能性を扱ったものだが) によれば, 就学前の幼児でも心理的特性は変容しやすく, 身体構造に関する特性 (例えば目の色) は身体機能による特性よりも変容しにくいことを理解しており (Inagaki & Hatano, 1993), 人が空中に浮かんでいられないことも理解している (Shult & Wellman, 1997)。心理的特性と身体的特性を親からの「遺伝」という点で区別しているという報告もある (Heyman & Gelman, 2000)。ここから考えると, 望ましくない特性の変容可能性の信念は無差別に適用されるのではなく, 特性のタイプによって異なって適用されるのではないかと予想される (予測3)。

方 法

被 験 者

被験者は新潟市内の私立幼稚園の5歳児24名 (平均年齢5歳6ヶ月, 年齢範囲5:0~5:11), 6歳児24名 (平均年齢6歳4ヶ月, 年齢範囲6:0~6:10), 新潟市内の公立小学校の3, 4年生24名 (平均年齢9歳10ヶ月, 年齢範囲8:10~10:9) (以下8-10歳児と略記), 大人として新潟県内の国立大学の学生24名 (平均年齢20歳4ヶ月, 年齢範囲18:7~21:7)。

刺激材料

望ましくない特性を持っている主人公について作成された8つの物語。8つの望ましくない特性は, 身体構造特性 (背が低い, 小指がない), 身体機能特性 (視力が低い, 走るのが遅い), 心理特性 (意地悪, 物覚えが悪い), 不変/不可能特性 (目の色が黒, 空中に浮かぶ) の4つのタイプに分けられる。不変/不可能特性以外はLockhart 他 (2002) で使用された特性と同じであるが, 彼らが心理特性, 生物特性, 生物・心理混合特性としていたものを上記のように整理した。なお男性被験者用に男児が主人公の物語を, 女性被験者用に女児が主人公の物語を作成した。

課 題

若年成人課題と老人課題があり、前者は Lockhart 他 (2002) で用いられた課題とほぼ同じで、後者はそれを老人になったときへと拡張したものである。いずれの課題も8つの物語からなる。各物語では、主人公が5歳と10歳のときに望ましくない特性を有しており、それを望ましい方向に変えたいと願っていることが示された後、主人公が21歳になったときに特性がどのように変化するかを以下の3つの選択肢のなかから1つ選ばせ、その理由を尋ねる(若年成人課題): (a)5歳, 10歳のときと同じ望ましくない特性のまま (b)中程度に望ましい特性へと変化している (c)とても望ましい特性へと変化している, である。若年成人課題の各物語終了後、引き続いてすぐ主人公が80歳になったときにどうなるかの予測を上記3選択肢の中から選ばせ、その理由を尋ねた(老人課題)。外的な介入によって主人公に変化が生じていないことを強調するために、主人公が病院で手術した経験をもたないこと、薬物を定期的に摂取してはいないことを明示した。課題セットの例を TABLE 1 に示す。各物語において、主人公の5歳時, 10歳時の様子を読み上げる際に、また各課題での3選択肢を読み上げる際に、それぞれの様子を表す絵刺激を提示した。

手 続 き

子どもの被験者に対しては、個別面接による実験を行った。8つの物語を提示する前に、幼児(5歳児と6歳児)に対しては、21歳だと若年成人, 80歳だと老人であることを被験者が理解しているかどうかを確かめるためのスクリーニングテストを行った。これは誕生日が何回もまわってきて21歳(80歳)になったらどうなるかを、2枚の絵——子どもの絵(若年成人)と若年成人(老人)の絵——から選択させるという課題で、5歳児5名, 6歳児の1名は正しく答えることができなかったため被験者から除外した(除外後の人数が5歳児, 6歳児各24名となった)。8つの物語の提示順序は被験者ごとにランダムで、若年成人課題, 老人課題における選択肢の提示順序もランダムであった。大人に対しては、8つの物語の提示順序を変えた冊子を4種類用意し、各被験者に冊子を配布し各自のペースで進めさせた。選択肢の提示順序は上記で示した選択肢 a~c の順に固定し、選択の理由づけを記入する欄も設けた。大人に対しては絵刺激は提示しなかった。

TABLE 1 ストーリー・課題セットの例(「背が低い」という特性)

若年成人課題

(主人公が5歳の絵を提示) タカコさんは幼稚園の5歳のとき、お友達と背比べをしてみると、背が一番低くて、タカコさんより背が低い子どもはいませんでした。タカコさんは、もっと背が高ければいいなあと思っていました。タカコさんは、いつか本当に背が高くなればいいなあと考えることがよくありました。

(主人公が10歳の絵を提示)

タカコさんは10歳になりました。小学4年生です(幼児の場合は、小学4年生くらいのお姉さんになりました)。タカコさんは幼稚園の5歳のときよりは背が高くなりました。でも同じクラスの女の子と比べるとやはりまだ背が一番低くて、タカコさんより背が低い子どもはいませんでした。タカコさんは、10歳のときもいつか本当に背が高くなればいいなあと考えることがよくありました。タカコさんは、クラスの他の女の子よりも背が高くなりたいと思っていました。

今では、タカコさんはもっと年をとって21歳です。大学生くらいのお姉さんになりました。タカコさんはこれまでに病院で手術をしたことはありませんし、薬を飲むこともめったにありません。今、タカコさんはどんなふうになっていると思いますか? 次の中から一番近いと思うものを選んでください。

- ① タカコさんは、今でも同じ年の他の女の子よりも背が低いです。
- ② タカコさんは、今ではもう同じ年の他の女の子と同じくらいの背の高さです。
- ③ タカコさんは、今ではもう同じ年の女の子と比べると背がとても高いです。

老人課題

では、タカコさんがもっとも年をとって80歳のおばあさんになったらどんなふうになっていると思いますか? タカコさんは80歳になるまでに病院で手術をしたことはありませんし、薬を飲むこともめったにないと思います。

- ① タカコさんは、80歳のおばあさんになったときも同じ年の他の女の子よりも背が低いです。
- ② タカコさんは、80歳のおばあさんになったときは、同じ年の他の女の子と同じくらいの背の高さです。
- ③ タカコさんは、80歳のおばあさんになったときは、同じ年の女の子と比べると背がとても高いです。

結 果

1. 若年成人課題，老人課題の特性改善得点の平均点の分析

若年成人課題，老人課題において「とても望ましい特性への変化」を選択した場合を3点，「中程度に望ましい特性への変化」を選択した場合を2点，「望ましくない特性のまま」を選択した場合を1点として，「特性改善得点」を算出した。TABLE 2 に年齢別，特性の種類別に各課題の特性改善得点の平均と標準偏差を示した。これらの得点を従属変数として，年齢を被験者間要因，特性と課題を被験者内要因として，年齢（4；5歳児，6歳児，8-10歳児，大人）×特性（4；身体構造，身体機能，心理特性，不変/不可能特性）×課題（2；若年成人

課題，老人課題）の3要因の分散分析を行った。その結果，年齢×特性×課題の交互作用が有意であったので（ $F(9, 276)=2.8, p<.01$ ），課題ごとに年齢×特性の単純交互作用を分析した。

若年成人課題では特性の主効果（ $F(3, 276)=106.6, p<.01$ ），年齢の主効果（ $F(3, 92)=11.6, p<.01$ ）が有意であり，交互作用は有意ではなかった。そこで年齢要因について Sheffe 法による対間比較を行ったところ，5歳児とその他の各年齢群の間に有意な差が見られ（全て $p<.01$ ），5歳児は望ましくない特性が望ましい特性へと変化すると予測することがより多かった。特性要因については乱塊法による2要因の分散分析を行った後，Sheffe 法による対間比較を行ったところ，不変/不可能特性<身体機能=身体構造<心理特性（差のある箇所は全て $p<.01$ ）であった。すなわち，望ましい方向

TABLE 2 若年成人課題，老人課題の特性改善得点の平均と標準偏差

特性のタイプ	年 齢 グループ	若年成人課題		老人課題	
		M	SD	M	SD
身体構造特性	5歳	2.29	0.75	2.29	0.75
	6歳	1.71	0.55	2.00	0.71
	8-10歳	1.60	0.39	1.90	0.55
	大人	1.52	0.28	1.60	0.39
身体機能特性	5歳	2.13	0.66	1.96	0.71
	6歳	1.94	0.60	1.85	0.56
	8-10歳	1.81	0.41	1.67	0.48
	大人	1.63	0.47	1.81	0.46
心理特性	5歳	2.58	0.55	2.48	0.65
	6歳	2.25	0.68	2.48	0.68
	8-10歳	2.29	0.36	2.56	0.45
	大人	2.27	0.42	2.40	0.57
不変/不可能 特性	5歳	1.71	0.82	1.98	0.84
	6歳	1.19	0.44	1.38	0.59
	8-10歳	1.04	0.14	1.15	0.23
	大人	1.06	0.22	1.08	0.28

注1) 得点範囲は1-3点。1点=「望ましくない特性のまま」を選択した場合，2点=「中程度に望ましい特性へと変化」を選択した場合，3点=「とても望ましい特性へと変化」を選択した場合

注2) 各年齢群の人数は24人

へ変化するのは心理特性がもっとも多く、次に身体特性であり（身体特性のなかでは身体構造に関わる特性も身体機能に関わる特性も変容しやすさではほぼ同じ）、不変／不可能特性は望ましい特性に変容しにくいと判断していた。

老人課題においては、特性の主効果 ($F(3, 276) = 91.2, p < .01$), 年齢の主効果 ($F(3, 92) = 5.1, p < .01$), 特性と年齢の交互作用が有意 ($F(9, 276) = 4.3, p < .01$) であった。交互作用が有意であったので、各年齢群ごとに特性の単純主効果を検定したところ、すべての年齢群において特性の主効果が有意であった（5歳児は $F(3, 69) = 6.0, p < .01$ ；6歳児は $F(3, 69) = 18.9, p < .01$ ；8-10歳児は $F(3, 69) = 50.9, p < .01$ ；大人は $F(3, 69) = 45.0, p < .01$ ）。そこで各年齢群ごとに乱塊法による2要因の分散分析を行った後、Scheffe法による対間比較を行ったところ、5歳児では不変／不可能特性＝身体機能<心理特性（不変／不可能特性と心理特性の差は $p < .05$, 身体機能と心理特性の差は $p < .01$ ）であり、身体構造はどの特性タイプとも有意な差はなかった。6歳以降の年齢群ではいずれも不変／不可能特性<身体機能＝身体構造<心理特性であった（6歳児においては不変／不可能特性と身体機能の差、身体構造と心理特性の差は $p < .05$ であり、不変／不可能特性と身体構造および心理特性の差、身体機能と心理特性の差は $p < .01$ 。小学生、大人においては差のある箇所はすべて $p < .01$ ）。

以上の結果は、5歳児は6歳以降の他の年齢群と比較すると、望ましくない特性は時間の経過とともに改善すると予測する傾向が強く、それは若年成人期のみでなく、老人期に対しても見られることを示している。また5歳児を含めてどの年齢段階の者も、若年成人期、老人期ともに、望ましくない特性の変

容可能性をどのタイプの特性に対しても同じように認めるのではなく、ある程度選択的に認めている——心理的特性がもっとも変容の可能性がある、次が身体的特性であり、不変／不可能特性はもっとも変容しにくいと予測していた。ただし5歳児では若年成人期においてほど老人期ではこの傾向が顕著でなかったけれども。さらに、上記の分析から、望ましくない特性が改善されると予測する傾向は、6歳以降の年齢グループでは統計的には顕著な年齢差は見られないことが示された。いいかえれば6歳児だけでなく小学生も大人も、年月を経るにつれて望ましくない特性は望ましい特性へと改善されていくという信念がある程度強いことは注目されよう。

2. 若年成人課題、老人課題における各選択肢の選択率の分析

TABLE 3は若年成人課題、老人課題において、「とても望ましい特性へと変化」「中程度に望ましい特性へと変化」「望ましくない特性のまま」の各選択肢の選択率を年齢別に示したものである。「とても望ましい特性へと変化」を選択した個数を従属変数として、年齢×課題の2要因の分散分析を行ったところ、年齢の主効果 ($F(3, 92) = 15.8, p < .01$) と課題の主効果 ($F(1, 92) = 15.9, p < .01$) が有意であった。年齢差についてScheffe法による対間比較を行ったところ5歳児とその他の各年齢群の間に有意差が見られ（全て $p < .01$ ）、5歳児で「とても望ましい特性へと変化」の予測をするものが有意に多かった。また課題の主効果がみられたことから、老人課題の方が、若年成人課題よりも「とても望ましい特性へと変化」を選択する割合が多いことが示された。

次に「中程度に望ましい特性へと変化」を選択し

TABLE 3 若年成人課題、老人課題における各選択肢の選択率

年 齢 グループ	若年成人課題			老人課題		
	Positive	Average	Negative	Positive	Average	Negative
5歳	50.5	16.7	32.8	50.0	17.7	32.3
6歳	22.9	31.3	45.8	34.4	24.0	41.7
8-10歳	12.5	43.8	43.8	27.6	26.6	45.8
大人	14.1	33.9	52.1	21.9	28.6	49.5

注1) 各年齢群における総反応数192（被験者24名×8反応）

注2) Positiveは「とても望ましい特性へと変化」の選択肢、Averageは「中程度に望ましい特性へと変化」の選択肢、Negativeは「望ましくない特性のまま」の選択肢を示す

た個数について、上記と同様の分析を行ったところ、年齢の主効果 ($F(3, 92)=8.3, p<.01$)、課題の主効果 ($F(1, 92)=12.1, p<.01$)、年齢と課題の交互作用 ($F(3, 92)=3.4, p<.05$) が有意であった。交互作用が有意であったため、課題ごとに年齢の単純主効果を分析したところ、若年成人課題でのみ有意であった ($F(3, 92)=9.9, p<.01$)。Sheffe 法による対間比較を行ったところ、5歳児とその他の各年齢群の間に差があり (6歳, 大人との差は $p<.05$, 8-10歳児との差は $p<.01$)、5歳児は他の年齢群より「中程度に望ましい特性へと変化」を選択する割合が有意に低いことが示された。さらに年齢ごとに課題の単純主効果を分析したところ、8-10歳児においてのみ有意な効果が見られ ($F(1, 23)=15.9, p<.01$)、若年成人課題の方が老人課題よりも「中程度に望ましい特性へと変化」を選択する割合が多いことが示された。

さらに「望ましくない特性のまま」を選択した個数についても、上記と同様の分析を行ったところ、年齢の主効果のみが有意であった ($F(3, 92)=3.4, p<.05$)。Sheffe 法による対間比較を行ったところ、5歳児と大人の間のみ有意差が見られ ($p<.05$)、5歳児は大人より「望ましくない特性のまま」を選択する割合が有意に低いことが示された。

以上をまとめると、5歳児はその他の年齢群に比べると、「望ましくない特性」は、「とても望ましい特性に変化する」と考える傾向が高く、この傾向は若年成人期と老人期に同じようにみられた。これに対し6歳児、小学生、大人は「中程度に望ましい特性に変化する」と考える傾向が高かった。また6歳児、小学生、大人は、「望ましくない特性のまま」を選択する割合は若年成人課題でも老人課題でも変わらないのに、「とても望ましい特性へと変化」を選択する割合は、若年成人課題でよりも老人課題においての方が高かった (TABLE 3 参照)。このことは、楽天主義傾向が強い5歳児では望ましくない特性は若年成人 (21歳) になるまでにとっても望ましい特性へと変化していると考えのに対し、「変化が生じるとしても少し」といった楽天主義が弱い6歳児、小学生、大人では、望ましい特性へと変化するには時間がかかる (80歳の老人になるまでかかる) と考えている可能性が示唆される。いずれにせよ、ここでの子ども達が、80歳という遠い将来にも望ましい方向への変化の可能性を信じていることは確かといえよう。

3. 望ましくない特性の改善の理由づけについての分析

望ましくない特性が改善されると答えた場合の理由づけ、すなわち若年成人課題では「とても望ましい特性への変化」ないし「中程度に望ましい特性への変化」を選択したときの理由づけ、老人課題においては若年成人課題の時に選んだ選択肢よりも望ましい方向への変化の選択肢を選んだ場合の理由づけ (但し若年成人課題でも老人課題でも「とても望ましい特性への変化」を選択した場合は、天井効果を考慮し、ここに含める) を8つのカテゴリー (老人課題は9つのカテゴリー) に分類した。TABLE 4 に各カテゴリーの分類基準と、回答例を、TABLE 5 には各カテゴリーに分類された回答の割合と頻度を年齢別に示した。なお被験者が回答の中で、複数のカテゴリーに入る理由を述べた場合は、 $1 \div$ (言及カテゴリー数) の値を言及された各カテゴリーに配分した。二人の判定者が独立に判定したところ、判定の一致率は若年成人課題で89.4%、老人課題で84.9%であった。判定が不一致であったものについては、二人の判定者の協議により決定した。

「反応の繰り返し・分からない・説明なし」以外の、意味の汲み取れる理由づけのみを対象として、以下のような分析を行った。若年成人課題、老人課題の各課題において、各カテゴリーの理由づけをした者の割合と年齢の間に連関があるかどうかを検討するために、各カテゴリーの理由づけごとに直接確率法による分析を行った²⁾。若年成人課題においては、「加齢・成熟」 ($p<.01$ 両側検定)、「努力・練習」 ($p<.01$ 両側検定) において有意な連関が見られた。残差分析の結果、「加齢・成熟」の理由をあげる者の割合は5歳児、6歳児は有意に多く (いずれも $p<.01$)、8-10歳児、大人は有意に少なかった (いずれも $p<.01$)。また、「努力・練習」の理由づけを行う者の割合は5歳児、6歳児は有意に少なく (いずれも $p<.01$)、8-10歳児 ($p<.05$)、大人 ($p<.01$) では有意に多かった。老人課題では「加齢・成熟」 ($p<.01$ 両側検定)、「努力・練習」 ($p<.05$ 両側検定)、「習得」 ($p<.05$ 両側検定)、「他者との相対的比較」 ($p<.05$ 両側検定) で有意な連関が見られた。残差分析の結果、「加齢・成熟」の理由をあげる者の割合は6歳児が有意に多く ($p<.01$)、大人が有意に少なかった ($p<.01$)。「努力・練習」の理由づけを行う者の割合については、5、6歳児で少なく、8-10歳児、大人で多い傾向があったが、いずれも有意ではなかった。「習

TABLE 4 特性が改善することに対する理由づけの各カテゴリーの定義と例

理由づけタイプ	定 義	例
加齢・成熟	加齢や成熟に伴う自然な変化によって改善すると説明したもの	「大きくなったから」「年をとったから」「大人（おじいさん・おばあさん）になったから」
生物学的・身体的	生物学的あるいは身体的な変化や特徴によって改善すると説明したもの	「成長期にぐんと身長が伸びた可能性があるから、他人よりも背が高いと思う」「足が長くなったので、他人よりも背が高くなった」
努力・練習	何かについて努力する、練習する、勉強することによって改善すると説明したもの	「努力をしてうまく覚えるためのコツを身につけたので、他人よりもたくさんものを覚えることができるようになった」「速く走れるように練習したので、他人よりも足が速くなった」
願望・意欲	こうなりたい、こうしたいという願望や意欲によって改善すると説明したもの	「常に優しい人になりたいと思っていたことで、少しずつ意地悪な気持ちが変化して優しくなった」
習得	他者から教えられて習得する、あるいは経験の増加により身につけることによって改善の説明をしたもの	「先生がどうしたらうまく覚えられるかを教えてくれたから他人よりもたくさん覚えられるようになった」「今までの人生の中でいろいろな経験をして、他人を思いやれるようになり、優しくなった」
他者との相対的比較	主人公とそれ以外の登場人物の特性の変化の程度を比較することによって改善について説明したもの	「他の人が走るのが遅くなったから、彼は（相対的に）速くなった」
特性の時間的連続性	21歳のときの特性はそのまま変わるものではないことを理由に、80歳のときも21歳のときと同じ状態であることを述べたもの	「優しいまま年をとっていきうように思うから、21歳のとき優しければ80歳になっても相変わらず優しい」
反応の繰り返し・わからない・説明なし	単に自分の選択した答えの内容を繰り返し述べているだけで、選択の理由を説明していない場合、分からないと答えた場合、何も答えなかった場合	
その他	上記以外の反応	

注) 「特性の時間的連続性」は老人課題においてのみ見られるカテゴリーである

TABLE 5 特性が改善することに対する理由づけの各カテゴリー-反応の割合と頻度

理由づけ反応のタイプ	若年成人課題						老人課題									
	5歳		6歳		8-10歳		大人		5歳		6歳		8-10歳		大人	
	%	(頻度)	%	(頻度)	%	(頻度)	%	(頻度)	%	(頻度)	%	(頻度)	%	(頻度)	%	(頻度)
加齢・成熟	21.7	(28)	34.1	(35.5)	18.1	(19.5)	10.7	(9.8)	21.2	(22)	41.4	(33.5)	35.4	(23.3)	15.4	(8)
生物学的・身体的	1.6	(2)	1.4	(1.5)	9.3	(10)	11.2	(10.3)	1.0	(1)	2.5	(2)	5.0	(3.3)	13.8	(7.2)
努力・練習	2.7	(3.5)	7.2	(7.5)	32.9	(35.5)	39.7	(36.5)	1.9	(2)	4.3	(3.5)	17.4	(11.5)	20.5	(10.7)
願望・意欲	5.8	(7.5)	6.7	(7)	15.3	(16.5)	21.4	(19.7)	2.9	(3)	2.5	(2)	11.4	(7.5)	8.0	(4.2)
習得	3.1	(4)	2.4	(2.5)	1.4	(1.5)	6.3	(5.8)	2.9	(3)	1.2	(1)	1.3	(0.8)	15.1	(7.8)
他者との相対的比較	0.0	(0)	0.0	(0)	2.3	(2.5)	2.0	(1.8)	0.0	(0)	0.0	(0)	2.3	(1.5)	10.2	(5.3)
特性の時間的連続性	-	(-)	-	(-)	-	(-)	-	(-)	1.9	(2)	6.2	(5)	7.6	(5)	7.7	(4)
反応の繰り返し・わからぬ・説明なし	61.2	(79)	44.2	(46)	13.9	(15)	2.2	(2)	62.5	(65)	38.3	(31)	16.7	(11)	1.9	(1)
その他	3.9	(5)	3.8	(4)	6.9	(7.5)	6.5	(6)	5.8	(6)	3.7	(3)	3.0	(2)	7.4	(3.8)
計	100.0	(129)	100.0	(104)	100.0	(108)	100.0	(92)	100.0	(104)	100.0	(81)	100.0	(66)	100.0	(52)

注1) 「特性の時間的連続性」は老人課題においてのみ見られるカテゴリーである
 注2) 頻度が整数でない場合は、同一被験者が2つ以上のカテゴリーの理由づけを行った場合、 $1 \div (\text{カテゴリーの数})$ で算出した数値をそれぞれのカテゴリーに付与したためである
 注3) 反応割合について、各セルの数値の小数点第2位以下を四捨五入したため、合計が実際(100.0)とは異なる値になる場合がある

() 内は頻度

得」「他者との相対的比較」の理由をあげる者の割合は、大人が有意に多かった(両方とも $p < .01$)。

以上のことから、若年成人期、老人期のどちらに対しても、5歳児、6歳児は、望ましくない特性は、加齢ないしは成熟によって自然に改善すると考える傾向が強いといえる。5歳児は、若年成人課題と老人課題の両方において、「反応のくり返し・わからない・説明なし」のカテゴリーを除く、意味の汲み取れる理由づけの中では、「加齢・成熟」の理由づけは、若年成人課題、老人課題とともに56%、6歳児では若年成人課題で61%、老人課題で67%を占めていた。これに対して、8-10歳児や大人では、努力すれば変化すると考える傾向が強く、「努力・練習」の理由づけは、大人では若年成人課題でも老人課題でも理由づけ反応全体の中の最も高い割合(若年39.7%;老人20.5%)を占め、8-10歳児でも若年成人課題では32.9%(意味の汲み取れる反応のなかでは38.2%)を占めていた。これらのことから、5、6歳の幼児は、加齢ないしは成熟によって望ましくない特性は望ましい特性へと自然に改善されると考える素朴楽天主義をもっているが、この素朴楽天主義は、少なくとも小学校中学年頃までには優勢でなくなり、それに代わって努力すれば変化する、ないしは努力しなければ変化しないと考える、いわば努力依存の楽天主義が出現するといえよう。但し、8-10歳児でも年月の経過がより長い老人期には「加齢・成熟」の理由をあげる者が3割強もおり、大人でも15%にそうした理由がみられる。また大人で見られる「習得」の理由のなかには、老人期にむけて積極的な努力はしないでも、経験が自然に増加することによって改善すると考えていると解釈できるものも多く(特に「意地悪」項目の理由付けで多くみられ、理由づけの40%を占めていた)、年月が望ましくないことを望ましい方向に変えてくれるという信念の根強いことがうかがわれる。

討 論

本研究では、大人になったら望ましくない特性はとても望ましい特性へと変化しているはずだという幼児の楽天主義が、自己高揚バイアスが強くなく、逆に自己批判傾向が強いといわれる日本の文化のもとでも見られるかを3つの予測のもとに検討した。予測1は、日本の幼児も楽天主義をもち、それは諸能力の増大傾向にある若年成人期まででなく、諸能力の低下傾向にある老人期にもみられるだろう、と

いうものだった。「とても望ましい特性へと変化」の選択肢を選ぶ割合の分析、特性が改善される程度を数値化した得点の平均点の分析から、少なくとも5歳の幼児は、幼少時にもつ望ましくない特性は若年成人になったときでも、老人になったときでも、とても望ましい特性へと変化するという信念が存在することが見い出され、予測1は確認された。理由の分析から幼児の持つこの楽天主義は「加齢・成熟」によるとするものが多い、という意味で素朴楽天主義であった。6歳の幼児もまた発達のメカニズムとして「加齢・成熟」をあげることが多いという意味では素朴楽天主義であったが、しかし望ましくない特性の変容の程度を5歳児ほど大きく見積もらず、「中程度の変化」とする特徴があったという点では後述の小学生の反応と近く、その意味で過渡的状态にあると考えられる。

予測2は、努力志向の信念の強い日本では、「努力依存の楽天主義」とでもいうべきものが児童期以降みられ、大人でもそうした楽天主義はかなり高い割合で見られるだろう、というものだった。「中程度に望ましい特性への変化」の選択肢の選択傾向と理由の分析から、ここでも予測2は確認された。望ましい特性への変化の可能性を中程度に見積もり、それを「努力・練習」によって可能とする反応が小学生では強く認められ、しかも大人でも同じように観察された。不変/不可能特性を除く6特性において「とても望ましい特性へと変化」「中程度に望ましい特性へと変化」のいずれかを選択した者の割合は、小学生の若年成人課題で73.6%(老人課題では67.4%)、大人では62.5%(65.3%)だった。これに対応する正確な数値はLockhart他(2002)では明らかではないが、彼らの示しているTablesの数値から算出すると、小学生が67%、大人が45%であることをみても日本人の大人での楽天主義の強いことがわかる。さらにLockhart他(2002)では望ましい特性への変容可能性に関して小学生と大人との間には有意差がみられ、大人では変容可能性を低く見積もる傾向が強くなるのに、日本では小学生と大人との間に有意差が見られなかった。これは、大人においても変容可能性を低く見積もることが日本では少ないことを示している。

予測3は、楽天主義はどのタイプの特性にも同じように適用されるのではなく、ある程度選択性を持っているだろう、というものだったが、これも確認された(TABLE 2)。児童や大人だけでなく、幼児でも変容可能性が最も高いのは心理特性であり、身

体特性がこれにつづき、人間のもたない空中に浮かぶや遺伝的に規定される目の色などの特徴には楽天主義をあまり適用せず、無差別に楽天主義を適用しているのではないことが明らかにされた。

以上見てきた結果から、幼児の素朴楽天主義——年月の経過とともに望ましくない特性はとも望ましい特性へと（自然に）変わるだろうという信念——は、どの文化でも普遍的に見られるものであるらしいことが強く示唆される。発達を「長期にわたる種々の技能の獲得」ないし「熟達化」と捉えたとき、こうした獲得ないし学習を支えている動機づけの重要性が浮上してくる。とくに幼児期は日常生活をおくる上で大人に比べ学ばなければならない技能は多く、その過程では多くの失敗に出会う。このような幼児が技能習得への意欲を失わずにいられる理由を明らかにすることは重要で、幼児の素朴楽天主義は、こうした発達への動機づけとして注目すべきものといえよう。

では幼児期以降学童期ではこの楽天主義はどうなるのか。多くの失敗にもめげず技能獲得（発達）への意欲を持ちつづけることは学童期でも同様に必要である。本研究の結果から、確かに楽天主義は小学生にも存在した。しかしそれは幼児の素朴楽天主義ではなく、努力依存の楽天主義——努力や練習さえすれば望ましい特性へと少しは変化させられるという信念——であった。現実認識が進むにつれて幼児のような単純に年月さえたてばともよい方向に好転するとは信じられなくなるからであろう。そして素朴楽天主義とはちがって、この努力依存の楽天主義は文化の影響を受ける——努力を重視する信念の強い文化ではより強くみられやすいことも特徴である。本研究では学童だけでなく大人でもこの「努力依存の楽天主義」が高い比率で見られた。この努力依存の楽天主義はアメリカの学童でもみられることは Lockhart 他（2002）でも報告されているが、大人では学童に比べ変容可能性を信じる傾向が有意に低くなることが報告されている。しかし本研究では、学童と大人との間に変容可能性を信じる傾向に統計的に有意な差は見られなかった。努力志向の信念の強い日本では、努力依存の楽天主義を持ちつづけることによって、長期にわたる技能の獲得で生じることの多い挫折や失敗をのりこえているのだろう。これに対して努力を日本ほど重視しないアメリカでは大人になるまでには消失ないし弱まるのではないかと推測される。北米の被験者を対象にした自己観の研究をレビューした Taylor & Brown（1988）によ

れば、ほとんどのアメリカ人は自分の性格特性や能力について、弱点や欠点よりも強みや長所の方を非常に多く認識しているという。例えば、望ましい性格特性と望ましくない性格特性のどちらが自己を正確に表しているかと問われると、（精神的に）健康な人は望ましくない性格特性より望ましい性格特性の方が自分の性格を圧倒的に正確に表していると判断する（Alicke, 1985; Brown, 1986）。一方、こうした知見を東洋人の研究結果と比較検討した北山（1998）は、望ましい属性を自らのうちに確認するという北米人の傾向は、日本人を含む東洋文化では大変弱い、場合によっては完全に逆転すると結論づけている。こうしたことを踏まえると、アメリカ人の場合は、そもそも望ましくない特性よりも望ましい特性に注目する傾向が強いので、望ましくない特性が改善されると考える傾向は弱くても、宿命論者にはならず、問題は生じないのだと思われる。「自己高揚バイアス」（北山, 1998）の強いアメリカでは、大人になるにつれて（いいかえれば文化の影響が強くなるにつれて）自己の望ましくない特性を改善しようと努力するよりは、自己の望ましい特性に注目しそれを強めていく方向の発達をめざすのであろう。

本研究から努力依存の楽天主義には文化の影響が大きいらしいことが示唆されたが、しかし文化の影響をより明らかにするには、同じ課題を用いて、異なる文化に属する被験者を直接比較検討する必要がある。今後の課題といえよう。

引用文献

- Alicke, M. D. 1985 Global self-evaluation as determined by the desirability and controllability of trait adjectives. *Journal of Personality and Social Psychology*, **49**, 1621-1630.
- Brown, J. D. 1986 Evaluations of self and others: Self-enhancement biases in social judgments. *Social Cognition*, **4**, 353-376.
- Dweck, C. S., & Elliot, E. S. 1983 Achievement motivation. In E. M. Hetherington (Ed.), P. H. Mussen (Series Ed.), *Handbook of child psychology: Vol. 4. Socialization, personality, and social development*. New York: Wiley.
- Gnepp, J., & Chilamkurti, C. 1988 Children's

- use of personality attributions to predict other people's emotional and behavioral reactions. *Child Development*, **59**, 743-754.
- Heyman, G., & Gelman, S. 1999 The use of trait labels in making psychological inferences. *Child Development*, **70**, 604-619.
- Heyman, G., & Gelman, S. 2000 Beliefs about the origins of human psychological traits. *Developmental Psychology*, **36**, 663-678.
- Holloway, S. D., Kashiwagi, K., Hess, R. D., & Azuma, H. 1986 Causal attributions by Japanese and American mothers and children about performance in mathematics. *International Journal of Psychology*, **21**, 269-286.
- Inagaki, K., & Hatano, G. 1993 Young children's understanding of the mind-body distinction. *Child Development*, **64**, 1534-1549.
- 北山忍 1998 認知科学モノグラフ9 自己と感情—文化心理学による問いかけ—共立出版:東京
- Lockhart, K. L., Chang, B., & Story, T. 2002 Young children's beliefs about the stability of traits: Protective optimism? *Child Development*, **73**, 1408-1430.
- Miller, S. M., Blalock, J., & Ginsburg, H. J. 1984-85 Children and the aged: Attitudes, contact, and discriminative ability. *International Journal of Aging and Human Development*, **19**, 47-53.
- Rholes, W., & Ruble, D. 1984 Children's understanding of dispositional characteristics of others. *Child Development*, **55**, 550-560.
- Rosenwasser, S. M., McBride, P. A., Brantley, T. J., & Ginsburg, H. J. 1986 Children and aging: Attitudes, differentiation ability, and quantity and quality of contact. *The Journal of Genetic Psychology*, **147**, 407-415.
- Sato, T., Namiki, H., Ando, J., & Hatano, G. 2004 Japanese conception of and research on human intelligence. In R.J. Sternberg (Ed.), *International Handbook of Psychology of Human Intelligence*. New York: Cambridge University Press.
- Schult, C. A., & Wellman, H. M. 1997 Explaining human movements and actions: Children's understanding of the limits of psychological explanation. *Cognition*, **62**, 291-324.
- 清水由紀 2000 幼児における特性推論の発達—特性・動機・行動の因果関係の理解—。教育心理学研究, **48**, 255-266.
- Taylor, S. E., & Brown, J. D. 1988 Illusion and well-being: A social psychological perspective on mental health. *Psychological Bulletin*, **103**, 193-210.
- Weinberger, A. 1979 Stereotyping of the elderly: Elementary school children's responses. *Research on aging*, **1**, 113-136.

付 記

本研究の一部に平成14年度日本学術振興会科学研究費補助金基盤研究(C) (課題番号14510124, 研究代表者: 稲垣佳世子), 平成15年度日本学術振興会科学研究費補助金若手研究(B) (課題番号15730293, 研究代表者: 中島伸子) の補助を受けた。

本研究をすすめるにあたって, および本稿の第1草稿に対して元放送大学教授 故・波多野誼余夫氏から貴重な示唆を得た。Yale 大学講師 Kristi Lockhart 氏には Lockhart 他 (2002) で使用した詳しい質問や刺激絵を送っていただいた。記して心から感謝の意を表したい。また本研究の実施に際してご協力くださった新潟市の旭が丘幼稚園, 新潟大学付属長岡幼稚園, 新潟市立新通小学校の先生方, 園児・児童の皆様, 理由づけのコーディングに協力して下さった新潟市立中之口幼稚園 馬場さつきさん, 調査補助に協力して下さった相場恵美子さん, 大森理聡さん, 木村博子さんに深謝したい。

脚 注

注) なお, 同一被験者が2つ以上のカテゴリーの理由付けを行ったため頻度が整数でない場合があるが, この場合は小数点第1位以下を四捨五入したうえで分析を行った。